<資　料>

現代日本の牧師

—— その出身階層と意識 ——

大道安次郎
宇賀博
関根秀和

新しい日本の夜明けとともに始められたキリスト教 ——とくにプロテスタント—— の宣教は，すでに約百年の歳月を経過した。「明治のキリスト教，大正のヒューマニズム，昭和のマルキシズム」(亀井) といわれるように，日本の近代化の途上で，青年層に影響を与えた思想の大きな脈流の一つにそれが数えられながら，その宣教のあゆみどりは宇余曲折をへて，こんにち大きな壁にぶつかっているようである。このことについては，すでに，キリスト教会の内部から宣教の内容や方法，あるいは信徒集団の信仰にたいする自省のかたちで検討が加えられており，その他にも，歴史＝社会的存在としてのキリスト教会を，社会思想史的な視角から把えて，問題の客観的な分析にいたろうとする労作も多く出ている。[1] 同じように問題への客観的な接近をめざす一つの試みとして，本稿は，とくに「中産階層の宗教」といわれている日本のキリスト教の性格を，その指導者である牧師の出身階層とその周辺の分析をとおして，社会学的に把えることをねらいとしたものである。わたしたちの叙述の順序としては，まず(1)明治期における牧師の出身階層や信徒の構成にふれ，問題点を指摘してから，それをうけて，つぎに，(2)わたしたちの調査[2] をもとに，現代日本の牧師の出身階層，教会の信徒構成，牧師の意識などを，ごく簡単に記してみようとおもう。しかしポイントは，いちおうこの後者においた。また，おことわりしておくが，本稿はわたしたちの研究メモにすぎない。

1

安政六年にアメリカ監督教会，長老教会，改革派教会より六名の宣教師が長崎，神奈川に送られてから，一四年後の明治六年に「切支丹禁制」の高札が撤去されるまで，つぎつぎに渡来する宣教師がひらいた英学塾は，洋学を志す青年をあつめ，次第にそのなかにキリスト教の信仰をうえつけていった。これらの青年のなかから，後年のキリスト教指導者が輩出するわけで，当時どのような青年がこれら宣教師の周辺にあつまってきたのかを知ることは，初期のキリスト教の指導者の社会的な性格を明らかにするうえで，きわめて重要である。明治維新の諸変革とともに，支配者としての性格を失った旧武士層は，薩・長・土・肥など新政府につらなる諸藩出身の人たちと，他方，旧幕臣，佐幕系の出身者の人たちとに，大別されることとなった。しかし，とうぜんのことながら，後者出身の子弟は，社会的上昇のルートを遮断されて独立独歩，自己の進路の開拓をせまられ，その前途に開かれた可能性の一つとして洋学修業を志すことになる。宣教師のもとにつどった人たちの大半がこれらの出身者であったらしく，後年，キリスト教の指導者となった人たちについては，たとえば隅谷教授の引用にもあるように，山路愛山はこうしるしている。

「植村正久は幕人の子に非ずや。彼は幕人が受けた

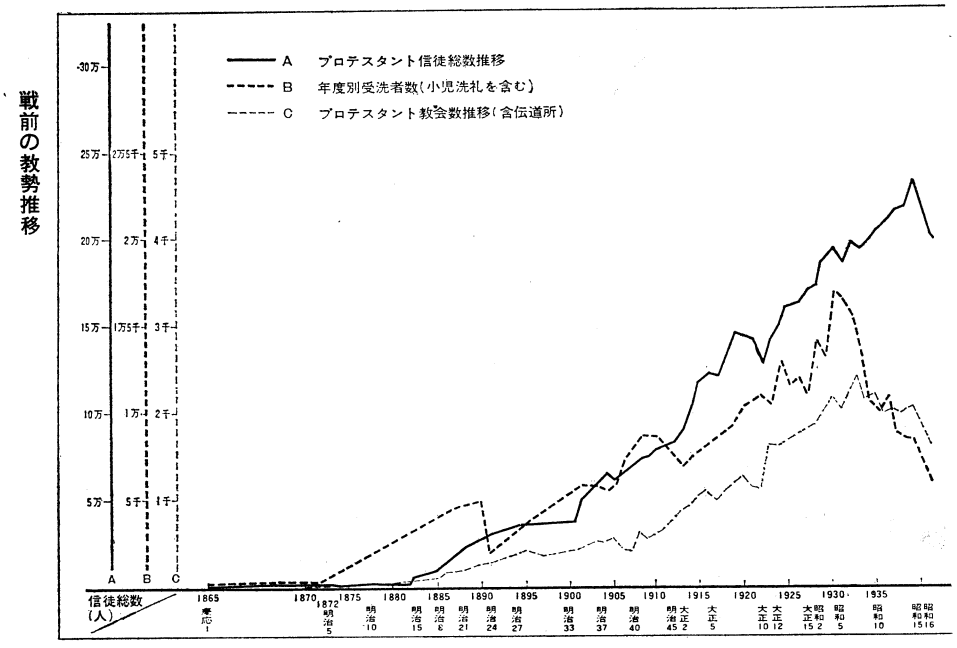
る戦敗者の苦痛を受けたるものなり，本多庸一は津軽の子に非ずや。維新の時における津軽の地位と其の苦心とを知るものは，誰か彼が得意ならざる境遇の人なるを疑ふものあらんや。井深梶之助は会津人の子なり。彼は自ら国破山河在の逆境を経験したるものなり。押川方義は伊予松山の人の子なり。松山も亦佐幕党にして今や失意の境遇にあるものなり。新信仰を告白して天下と戦ふべく決心したる青年が，揃いも揃って時代の順潮に棹すものに非りしの一事は，当時の史を論ずるものの注目せざるべからざる所なり。彼等は浮世の栄華に飽くべき希望を有せざりき。」[3]

初期のキリスト教の指導者は，こういった人たちであり，またかれら自身が国内でキリスト教の宣教にはじめて接触した人びとであった。横浜の「日本基督公会」（明治五年二月～六年一月の禁教下）の信徒三十二名（内女子四名）のうち，三名の僧侶（謀者）と一名の医者や，その他，六，七名のほかは，このような佐幕系士族が有力なメンバーであったことも，[4] この事実を物語っている。キリスト教の浸透の第一の経路は，まずこのような仕方でひらかれ，つぎにここでは詳しくはのべえないけれども，これら士族信徒の伝道活動によりさらに，たとえば「封建的な桎梏を廃止して近代的農民，第三階級へ成長しようとする中農，富農，小地主層は，経済的，身分的な重圧を加えている半封建的体制を排除しようとし，あるものは百姓一揆をもって戦ったが一部のものはあらたにはいって来たキリスト教に着目した。経済的な抑圧にもまして彼らを窒息せしめていた身分的隷属に対し，キリスト教に四海同胞，士族も平民も，およそ人たる以上神の前に価値の上下はないことを教えたからである。農民層の指導者たちは熱心に道を求めた。」[5] といったように第二のプロセス ——むしろこれがヨーロッパ的な正常な発展とおもわれるけれども—— がひらかれていった。これら

第1表　プロテスタント信徒教

明治 6 年	59(人)	明治 30 年	36,207
〃 10 〃	836	〃 33 〃	37,068
〃 13 〃	1,859	〃 34 〃	50,785
〃 14 〃	2,114	〃 37 〃	66,133
〃 15 〃	5,092		
〃 18 〃	9,536		
明治 21 年	23,026	明治 40 年	71,813
〃 24 〃	31,361	〃 45 〃	83,638

（日本基督教団宣教教研究所編『プロテスタント百年史研究』日本基督教団出版部，1961，104-109ページ，参照）



（『基督教年鑑』昭和35年度版・参照）

二つの経路によるキリスト教の浸透は，欧化時代における上流階層への一時的なのびなどを含みながら，上の図表がしめすごとく，二〇年代のはじめまできわめて順調な進展をみせることになった。

しかし他方，その背後で社会の状勢は明治一五年頃から一変してくる。このことは重要である。つまり「絶対王制に忠実な資本主義」＝天皇制体制の確立と，いわゆる半封建的な「寄生地主的土地所有」の確立のプロセスがそれであった。これは日本の近代化の構造の問題であるが，その進行につれて初期のキリスト教を支える社会的な地盤（さきの二経路によって浸透した）が分解し，二〇年代後半以降のキリスト教の沈滞を招来することとなる。二四年の「不敬事件」は，教育と宗教の衝突であったけれども，それはキリスト教と天皇制国家主義との衝突という意味でシンボリックな事件であり，以後日本のキリスト教界の主流は，その体制のなかに，やがて，いわゆる「埋没」するというプロセスを歩む。「日本風のキリスト教」（横井時雄）——自由主義神学の影響のもとに——や，「神道的キリスト教」（海老名弾正）は，かかる外からの圧迫と相呼応した内からの変質であった。

二四年一月，第一高等学校において教育勅語礼拝の儀式が行われたとき，礼幌バンド出身のキリスト教徒である内村鑑三が，キリスト教徒としての良心に基ずいて礼拝を拒んだことが，「不敬事件」として喧々囂々（けんけんごうごう）の論議をまきおこし，その結果，内村は友人に代拝を後から行わせたにもかかわらず，第一高等学校の教壇から追放された。日本基督教会の植村正久が，「福音週報」紙上において，勇敢に，「吾人は今日小学中学等に於て行はるる影像の敬礼や勅語の拝礼を以って殆んど児戯に類することなりといはずんばあらず。吾人は人類の尊貴を維持せんと欲する一丈夫として，かかる，弊害を攻撃せざるを得ず」という抗議を行い，さらに押川方義等と連名で，くりかえして批判を公開したのに対し，政府は「福音週報」の発行停止をもってこれに酬い，キリスト教が神権天皇制に反対する自由を永久に奪い去ったのである。[6]

さて，明治二〇年代末から日本の資本主義は急速な発展をとげ，いわゆる「産業革命」の展開をみるのであるが，これにともなって，三四年以降キリスト教界もまた生気をとりもどし，活発な伝道がなされる。「三〇年代は，キリスト教界に大きな地すべりが生じ，新しい問題が提起された時期である。」とは例の隅谷教授の言葉であるけれども，日本の資本主義の発展が新らしい社会層（＝都市の中産インテリ層）を生みだし，それによって日本のキリスト教が「地すべり」というかたちで恰好の土壌をえたいきさつは注目されなければならない。すなわち，この資本主義経済の発展は同時に労働者階級を生んだし，また労働問題や社会問題をも生んだ。これらにたいしてキリスト者は決して無関心ではなかったし，そればかりか明治三〇年代の著名な社会主義者の多くは，たとえば，安部磯雄，片山潜，西川光次郎，木下尚江，石川三四郎らはキリスト教徒であって，その活動は瞠目すべきものがあった。けれども，かれらは前述の主流にうけ入れられず，やがてキリスト教から去って行く。けっきょく，キリスト教はかれらを媒介にして労働者階級に浸透することなく，シニカルにその表面を流れ去ってゆく。そして問題をこんにちに残した。

だから，いわゆる「うえからの近代化」とともに，初期の地盤を喪失した日本のキリスト教が，そのメンバーの空白を新しい社会層（都市の中産インテリ層）の成員で急速に埋めていったプロセスは，以上のような発展と挫折の問題を内包してかなり屈折したものであった。

ところで教会が基盤とするに至った中産インテリ層は，日本の社会においてもっとも個人主義的な生活態度の濃厚な階級であった。それゆえ共同体的な制約からそれだけ解放されることによって，プロテスタンティズムの信仰を受け入れる可能性を大にしたと同時に，他面，個人の小市民的生活の中に安住して，社会に対して積極的に責任を負うことを回避することともなった。こうしてキリスト教会も天皇制と資本主義の体制に包摂されてゆき，その大勢は日清・日露の両戦争を通じて自らが決して反国家的，反社会的でないことを実証するため戦争に奉仕し，さらに日露戦争後の日本社会の動揺の中で，体制維持のために協力し，四五年の三教会同においては，神道・仏教とともに，「皇運を扶翼し，国民道徳の振興を計らん事」を決議し，教育勅語の改訂普及版である「国民道徳」の強化宣伝の一翼をにない，天皇制体制の再建と擁護のために活動するにさえ至らざるをえなかった。[7]

以上のべてきたところは，きわめて簡単な明治期キリスト教のスケッチであったが，その社会的な地盤やそれのもつ限界 ——日本のキリスト教の中産階層性—— は，そのままこんにちの日本のキリスト教の性格につながっている。

さて，うえに簡単にふれた初代の日本の牧師とその信仰の影像を，いま少し浮き彫りにしてみよう。初期の牧師が，士族出身であったことはすでにのべたとおりである。小川義綏，奥野昌綱，粟津高明，本多庸一，押川方義，熊野雄七，井深梶之助，植村正久，戸川安宅，松山高吉，平岩愃保，海老名弾正，宮川経輝，金森通倫，小崎弘道，浮田和氏，沢山保羅，新島襄，内村鑑三，新渡戸稲造，宮部金吾，大島正健。以上は，いずれも士族の子弟であり，少数の例外のほかは，そのほとんどが旧幕臣，佐幕系の出身であった。そしてかれらが士族の子弟であったところに，日本のキリスト教の特異な発祥がある。つまり，その第一は，かれらの信仰が儒教の延長のかたちで始まっており，その意味では伝統的社会の世界観の否定が不十分で，一般的にいって，のちに旧道徳との妥協の余地——もちろん日本の「うえからの近代化」をあわせて考えなければならぬけれども—— をのこしたことである。

小崎弘道によれば，「私共が儒教より進んで基督教に入ったのは彼を捨て之を取ったのではなくて，基督教は儒教の精神，孔子の教の真意を成就するものなることを信じたからである」と。また，松村介石によれば，「耶蘇教の所謂る神とは，即ち儒教の所謂る天帝，天皇ではないか，されば汝は幼少時代より此の神の存在を信じていた筈だ」とのべている。（久山編，前掲書，66ページ参照）

その第二は，かれらの信仰が新日本の建国の志士としての心情のうえに据えられており，これがかれらの信仰にかなり nationalistic な色彩をつけ，そしてそれが後年，天皇制を支柱とする国家主義が台頭すると，そのなかに埋没する素地となったことである。

「僕不肖と雖も国家の為に寸力を竭さんことは僕赤心望む所，然れども僕は今脱櫪不羈の身・神の徒となり候故，再び頭を下げ藩邸に帰り僅の俸禄に甘んぜん事を嫌ふ。僕は真神の臣にして我日本の臣なる故，真神日本のために丹心を尽さんことは僕の急務と云ふべし。」（久山編，前掲書，56–57ページ参照）

明治一六年，東京・横浜を中心としていわゆるリバイバルの状態がおこり，各地でにわかに信徒の増加がみられ教勢が発展した。このときの事情を宣教師ケリーの手記によると「それまで，多くの人々にとってキリスト教を信ずるとは，その真理を知識として承認することに外ならなかった。しかし今や，彼等にも真に人格的な罪の意識を知り，人格としての，救主としてのキリストを信じ，他人の精神的幸福を切に望む者となった」と紹介されている。まえの「特異な発祥」からきりはなされて，「福音信仰」というかたちでキリスト教が信徒のあいだに定着しはじめるのはこの頃からであり，小崎弘道の政府新論などによってキリスト教による儒教批判が展開されるのもようやくこのあたりからである。そして，キリスト教と日本の精神的土壌との対決が不可避のものとして牧師や信徒にはっきり意識されだしたときには，明治二〇年代の国家主義の台頭とそれらからの攻撃がどっと頭上ふりかかって，外側からは四囲の社会的圧迫となり，内側からは横井時雄らの「日本主義的キリスト教」という妥協の形態を生みだした。かれは二三年の「日本将来の基督教」のなかで，

「今日我邦に行はるる処の基督教は，多くはこれ英米のキリスト教なり。未だ以て之を日本風の基督教と称すべからざるものあり，これより以後は日本風の基督教を発達するの機会到来したるなれ。此機会に乗じて我日本風の基督教を宣伝せば，天下の人心は必ず靡然として之に服せん。」（隅谷三喜男『日本社会とキリスト教』東大新書，1954，40ページ参照）

と論じている。だから，士族信仰の形態から生じた日本の初代キリスト教の特異体質は，日本の精神的土壌との対決の自覚を弱め，その意味でこの時期における国家主義思想との妥協をきわめて容易にしたし，いったん圧迫がはじまったときには，たちまちにして「妥協」と「埋没」の姿勢に陥いる可能性や弱さを内包していた。

2

それでは，こんにちのキリスト教の性格はどのようなものであろうか。この点について，つぎにわたしたちの調査にもとづいて簡単に説明してみようとおもう。まず(1)事実 ——いわゆる「中産階級性—— をおさえ，つぎに(2)牧師の出身階層や経済生活や，さらに日本のキリスト教の現状にたいするかれらの意見を調べることによって，現代日本のキリスト教というものに社会学的なメスをいれてみたい。(ただし本稿では，調査結果の説明と簡単なコメントだけにとどめる。)

第2表　信徒の年令構成

年令＼教派	プロテスタント(%) 男	プロテスタント(%) 女	カトリック(%) 男	カトリック(%) 女
50 —	22.6	17.4	9.9	8.9
40 — 49	18.3	24.7	10.3	11.5
30 — 39	31.7	27.8	20.8	21.3
20 — 29	21.5	24.0	31.2	32.7
— 19	5.9	6.3	27.7	32.8

注 1) 女性の割合はプロテスタントの場合60.8%，カトリックの場合62.8%を占めている

2) 初期のキリスト教信徒の男女比。たとえば，「小崎弘道によれば，他の邦国においては，女子の会員常にその多数を占めないことはない。然れ共，日本にては全くこれが反対で，男子の会員に対する比例は大概4と3の割合である。」(隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社，1961，97ページ)

日本の教会　まず第2表は，信徒の「年令構成」をしめすものであるが，プロテスタント・カトリックを通じて，性別にかかわらず，二〇才より四〇才までの信徒が全信徒数の50%以上を占めること。プロテスタントにおいては五〇才以上の者は両性を通じて20%前後にすぎず，カトリックにおいても10%あまりでともに高令者の僅少性が顕著で，信徒がかなり若年層にかたよっていることがわかる。「性別」の構成ではプロテスタント60.8%，カトリック62.8%で共に全信徒の約六割を女性信徒が占めており，小崎弘道によれば明治一八年前後の信徒構成が男女比4：3であったのであるから，その後，キリスト教会の女性化が著しく進行していることがわかる。

他方，信徒の「職業構成」(第3表) は新・旧両教派共に，事務・販売（2割）主婦（新教3割・旧教5割）に集中しており，これに学生を加えるとプロテスタントでは全信徒の6割以上，カトリックではほとんど8割方近くが，それらの人々で占められることになる。また小企業主・店主・工員・単純労働者・農林水産業従事者がきわめて少ないことは，新・旧いずれの側にもみられる共通の状況である。なお参考までに，信徒の階層を上・中の上・中・中の下・下の五段階で牧師に選択評価させてみたが，その結果はプロテスタント・カトリックを通じて信徒の約8割程度が中流階層にランクされた。だから，日本の教会が，中産階層性・女性化・低年令性といった諸性格を，その一般的な性格としてもっていることが指摘される。

第3表　信徒の職業構成

職業＼宗派	プロテスタント (%)	カトリック (%)
大中企業の管理職，および学校教師・技師・医師 etc. の専門職	12.2	4.3
事務・販売・その他の俸給生活者	21.1	20.5
小企業主・店主・その他の単独自営業	5.3	2.1
工員・店員・単純労働者その他賃金労働者	10.1	10.9
農・林・水産業従事者	2.3	2.6
主婦	31.5	49.0
学生	10.4	9.8
その他	7.2	1.3

(ただし，注2・参照)

第4表　信徒の階層

階層＼教派	プロテスタント (%)	カトリック (%)
上	4.5	4.8
中・上	9.2	11.8
中	53.7	42.8
中・下	25.7	29.9
下	6.9	9.7

(ただし，これは牧師・神父による主観的な信徒の階層評価にもとづく)

現代の牧師　さて，我国のプロテスタント伝道における最初の入信者が，旧佐幕系の士族層に集中的であり，その最初の入信者のなかの主だった

者が，ほとんどそのまま，初代の牧師としてプロテスタント伝道の指導者に転じていったことはすでにのべた通りであるが，それではその後の牧師の補充はどのような経過をたどって現在にいたっているのであろうか。

第4表　牧師の父親および祖父の職業（職業移動表）

父親の職業＼祖父の職業	大中企業主管理職	専門職	小企業主（その他自営業）	事務販売	労動者職人	農業	軍人	士族	教役者（牧師）	その他無職	不明	計
大中企業主管理職		1	4	1		2	1	1		1	3	14(6.0%)
専門職	2	2	5	1		5	2	2		2	2	23(9.9%)
小企業主（その他自営業）	1	1	17	1	3	7			1		15	46(19.8%)
事務・販売		2	3	1		8	1	1		2	6	24(10.3%)
労動者・職人		1	3	1		9				1	4	19(8.1%)
農業		1	2			32		1			9	45(19.4%)
軍人			1	1		3		1				6(2.6%)
士族								1				1(0.4%)
教役者（牧師）		5	4	1	2	15		2	4	2	8	43(18.5%)
その他・無職						2		1		1	2	6(2.6%)
不明						1					4	5(2.2%)
計	3(1.3)	13(5.6)	39(18.6)	7(3.0)	5(22)	84(36.2)	4(1.7)	10(4.3)	5(2.2)	9(3.9)	53(22.8)	232

まず現代の牧師の祖父から父親への職業移動（第4表）を調べてみると，祖父の代に全体の36.2%を占めていた農業が父親の代では19.4%に減少し，当然のことながら祖父の代にはきわめて僅かであった大・中企業主・管理職・事務・販売などが，それぞれ増加して全体の26.2%を占めていることなど，総体的に祖父から父親への職業移動も近代的・都市的職業への集中化の傾向をみせている。ある意味で，この第4表はまた，日本の近代化のインデックスでもある。（なお第4表によると，現代の牧師のおもな出身ソースは，静態的にみるなら，農業・小企業経営者層・牧師の三つの職業階層である。）それから第5表は「牧師の系譜」——わたしたちはかりにこうよぶが—— をしめしたものであるが，全体の約6割は本人の選択で，はじめてかれが牧師になったことをしめしている。しかし多くのパーセンテージは何等かのかたちで親類に牧師がいることをしめしていて，このことはとりわけ重要である。さらに第6表によると，昭和生れの牧師は三人に一人が牧師を父親に持っていることがわかるし，つまりこのことから，現代の牧師は限られたキリスト教的環境のなかから出身し，しかもその補充過程は，年をおって加速度的とさえいえるほど，世襲的（？）あるいは閉鎖的

第5表　牧師の系譜

	実数(%)
祖父・父・自分・子供	0(　0)
祖父・父・自分	4(2.25)
祖父　自分	1(0.4)
父・自分	39(16.8)
父・自分・子供	0(　0)
自分・子供	7(3.0)
自分	117(50.4)
自分・親類（父母の兄弟関係）	10(4.3)
自分・親類（兄弟関係）	23(9.9)
自分・親類（配偶者関係）	28(12.6)
自分・親類（子供の配偶者関係）	1(0.4)
計	232
不明	2(0.9)

（上表は，父親・祖父が牧師であるかどうか，そうでない場合親類（母方・兄弟・配偶者）に牧師がいるかいないか，を調査したものである。これと第6表によって，牧師の出身階層の「閉鎖性への傾向」がうかがえる）

第6表　牧師の父親の職業（牧師の生年別）

父親の職業 / 牧師の生年	大中企業主 管理職	専門職	小企業主 (醸造業を含む)	事務・販売	労働者 職人	農業
明治	5(4.85%)	7(6.8%)	19(18.4%)	10(9.7%)	8(7.8%)	33(32.0%)
大正	3(44%)	9(13.2%)	17(25.0%)	11(16.1%)	4(5.9%)	6(8.8%)
昭和	5(85%)	7(11.8%)	9(15.2%)	3(5.1%)	7(11.8%)	6(10.1%)

父親の職業 / 牧師の生年	軍人	士族	牧師	その他 無職	不明	計
明治	3(2.9%)	1(1.0%)	10(9.7%)	5(4.9%)	2(1.9%)	103(44.8%)
大正	2(2.9%)		13(19.1%)	1(1.5%)	2(2.9%)	68(29.6%)
昭和	1(1.7%)		20(33.9%)		1(1.7%)	59(25.6%)

第8表　父親および祖父の学歴

学歴	父親(%)	祖父(%)
ナシ	9(3.8%)	10(4.3%)
小学校(高小)	90(38.7%)	49(21.1%)
旧中	23(9.9%)	3(1.3%)
旧高専	41(17.6%)	10(4.3%)
旧大	27(11.6%)	2(0.9%)
寺小屋・その他	19(8.2%)	15(6.5%)
計	232	
不明	23(9.9%)	92(39.7%)

学校卒業者比率の推移(1890—1958)

教育水準	1890(%) 明治23年	1910(%) 明治43年	1930(%) 昭和5年	1950(%) 昭和25年	1958(%) 昭和33年
適令未就学者	83.27				
小学校卒	15.8	95.1	85.8	70.3	63.9
中等学校卒	0.6	3.8	10.4	22.3	28.6
高専卒	0.3	0.9	2.9	4.2	0.8
大学	0.03	0.2	0.9	3.2	6.7

（資料：帝国統計年鑑，関西学院大学万成博氏調べ　ただし，数字は各年次の学卒者の比）

傾向を帯びつつあるといえるのではなかろうか。また，かれらが，おおくは都市の中産階層の出身者であることはうえに指摘したとおりであって，祖父および父親の学歴（第8表）が日本の学卒者比率にくらべてかなり高いパーセントをしめしていることからも，そのことがうかがえる。そしてこのような都市中産階層性への傾斜が，明治期とはちがった牧師のタイプを生んでいるわけである。

ちなみに牧師の周辺のキリスト教への入信率をみると，祖父あるいは父親がキリスト教徒であるものがそれぞれ14.2%と34.5%で（第7表）兄弟で信徒となっているものは全体の46.7%であった。

第7表　父親および祖父の宗教

	父親	祖父
キリスト教	80(34.5)	33(14.2)
仏教	116(49.9)	143(61.6)
その他	11(4.7)	29(12.5)
不明	25(10.8)	27(11.6)
計	232	232

それでは，牧師の現在の生活状態はどのようなものであり，またかれらは，自分たちの生活（経済状態）を，どの程度に評価しているのだろうか。

第9表によれば，牧師の家庭の月収は副収入および配偶者の収入をも含めて5万円以上のものは全体の約11%にすぎず，3万円以下のものが全体の50%をしめている。牧師の平均年令が48.2才であり，その平均家族数が3.7人であるから，かれらの生活程度は一部のエリート牧師を除いて，かなり低く質素なものと考えなければならない（現物給付をあわせて考えねばならないけれども）。この現状にたいして，公務員または学校教師ナミへの収入の改善をのぞむ者が多く，「満足」または

第9表　牧師の月収（副収入および配偶者の収入をも含む）

昭和38年8月—昭和39年2月　現在

	1万以下	1.0～1.4	1.5～1.9	2.0～2.4	2.5～2.9	3.0～3.4	3.5～3.9	4.0～4.4	4.5～4.9	5.0 以上	無記入	計
日本基督教団	13	8	13	13	19	20	13	14	6	20	6	145
聖公会		4	6	3	5	3	7	1	2	3		34
諸派	4	1	1	9	10	6	4	2		3		37
カトリック	1	2	4		1	1		1			3	16
計	18	15	24	25	35	30	24	18	8	26	9	232

注　1)　カトリック神父は独身
　　2)　平均年令48.2才，平均家族数3.7人

第10表　収入への満足度

	満足	公務員ナミ	学校教師ナミ	その他世間ナミ	不満足計(%)	口にすべきでない	わからない	その他	不明	計
日本基督教団	10	44	44	11	99(68.2)	11	1	12	12	145
聖公会	7	11	4	4	19(55.9)	4		2	2	34
諸派	6	12	8	4	24(64.8)	2	1	3	1	37
カトリック	1	3	3	3	9(56.3)	1		3	2	16
計	24	70	59	22	151(65.0)	18	2	20	17	232

「口にすべきでない」と答えた者は全体牧師数のわずか2割程度にすぎなかった。(第10表)

これら現在の牧師の諸状況から，現代日本の牧師の社会的性格について，つぎのような結論をまとめてみることができる。現代日本の牧師は(1)都市の中産インテリ階層をその出身の背景とするようになってきており，(農業・小企業（醸造業）→小企業主層・専門職・牧師)(2)その補充は閉鎖的・世襲的(？)傾向がつよまりつつあって，さらに(3)除々に専門職業化——学校教師のような——しつつある傾向にある。最後の点について，さらに牧師の職業上の前歴を調べてみたところ（第11表)，明治生れの牧師の67%が，何等かの職歴をもつ献身者であるのにたいして，昭和生れでは逆に64%が職歴をもたないはじめからの専任者であって，明治期に顕著であった「職をすてて献身する」という型の減少や，あるいは前述のごとく生活状態への積極的な不満の表明が強くなされていることからも，(3)については言及できるわけである。しかし，後者の生活の問題には当然の主張もあり，そこにかれらの「苦悩」がみうけられる。

第11表　牧師の以前の職業

職業＼生年	明治	大正	昭和	計
大企業主・管理職	1	1		2
専門職	7	2	4	13
小企業主	6	5		11
事務・販売	20	9	6	35
労働者	9	8	5	22
農業	5	2	1	8
教師	17	9	5	31
旧軍人	1	1		2
その他	2	2		4
なし	34	29	38	101
不明	1			1
計	103	68	59	230

日本のキリスト教の中産階層性　隅谷教授は，日本人のキリスト教への改宗が他のアジア諸国の場合とことなって集団改宗のかたちをとらず個々人の回心として生起している点を指摘しながら，その原因が伝統的社会の拘束力の弱体化にあると説明し，さらに論をすすめて，日本のキリスト教の不毛性をその弱体化の不徹底にもとめた。つま

り，一方で比較的近代型の入信経路をゆるした同じ土壌が，他方でキリスト教の不毛性を生みだした原因として，伝統的社会の共同体規制の残存とその再編成が「新しい社会関係の成立」[8]を説くキリスト教と対立しているプロセスをあげているわけで，そこに日本のキリスト教が中産インテリ層の宗教として，入信によって伝統的世界から疎外された個人の集りとしてのみ形成され，ついに家庭のなかにも地域社会のなかにも根をおろすことができなかった事情をみいだしている。

この同じプロセスを，キリスト教会の内部からは「土着化」という概念で検討しようとしているが，そこでは主として日本の精神的伝統との対決が問題としてとりあげられ，日本の精神的土壌にキリスト教が本当に根をおろすという意味での土着化が問題にされているようである。武田清子教授によれば，

「こうした立場は，日本的なものとの関係において，二つの対照的な在り方を生み出して来たように思えるのです。一つは，日本的なものを拒否し，日本社会への定着化というようなことを重要視せず，ひたすらキリスト教の純粋を守ろうとする在り方，それは，孤立の純粋ともいえるでしょう。もう一つは，キリスト教の本質を拒否し，排撃しようとする社会にあって，対決を放棄し，大胆にキリスト教そのものを日本化することによって，平和的な在り方を獲得しようとして来たものであって，それは妥協の埋没ともいえるかとも思う。」[9]

日本のキリスト教が，対決しなければならなかった封建社会の共同体的規制や，あるいは伝統的な精神的土壌などの究明は別にして，現代日本の牧師が，これらの「壁」とどのようにとり組み，どのような態度をしめすかは，今後にわたって，日本のキリスト教の帰趨を決する重要な問題であるだろう。さて調査で，われわれが知った結果は次のようなものであった。牧師の政党にたいする

第12表　キリストのいわゆる「中産階層性」に対する牧師の態度（意議）

支持政党＼態度	好ましいゆき方として是認	好ましい地盤しかし上下にひろげる必要をみとむ	別に問題にする必要なし(中立傍観的)	止むを得ぬ	止むを得ぬしかし階層をこえて福音をのべ伝える事が必要	反省，一般大衆の中に入りこむ必要がある	その他	無回答	計
自民	8	1	6	2		2	2	1	22
民社	3	8	2	2	4	8		2	29
社会	12	12	15	5	18	34	2	9	107
共産	1	2	2		1	1			7
その他	1	1							2
ナシ	6	5	10	2	8	13	2	9	55
不明			1			4		5	10
計	31(13.4)	29(12.5)	36(15.5)	11(4.7)	31(13.4)	62(26.7)	6(2.6)	26(11.2)	232

第13表　キリスト教の「土着化」に対する牧師の態度（意議）

支持政党＼態度	福音の純粋性をまもる。土着化に批判的	純粋性をまもりながら，日本の現実と対決の必要	かなりの習俗化（日本化）として理解	その他	別に問題にしない。中立的，消極的	西欧的発想を反省しつつ日本の現実と対決の必要（福音の純粋性を余り問題にせぬ場合）	無回答	計
自民	2	1	2	4	9	3	1	22
民社	5	3		4	9	6	2	29
社会	26	17	4	6	21	23	10	107
共産		1		2	1	3		7
その他	1		1					2
ナシ	10	9	4	6	14	7	5	55
不明	2			2	1	2	3	10
計	46(19.8)	31(13.4)	11(4.7)	24(10.3)	55(23.7)	44(19.0)	21(9.1)	232

日本のキリスト教の現勢

	教会（伝道所）数	信徒総数
新教	3,713(1,680)	391,015
日本基督教団	1,268(329)	189,152
聖公会	251(89)	45,585
諸派	2,194(1,262)	156,278
旧教	720(168)	305,832
カトリック	676(168)	296,617
諸派	44(—)	9,215
総計	4,433(1,848)	696,847

（ただし，『基督教年鑑』昭和39年度版より作成）

教会設立年

	実数（%）
明治	85 (37.6)
大正	33 (14.6)
昭和	
戦前	39 (17.3)
戦後	69 (30.5)

（調査関係分，ただし不明6）

支持は革新系に集中しており（61.6%），とりわけ社会党支持者は46%で全体の約半数にわたっている。また，かって明治末期より大正にかけて日本のキリスト者が社会運動において先駆的な役割をはたしたことについての評価では78.9%の者が「正しい」と是認の態度をしめし，これらの点ではかなり現状批判的ないしは改革的であった。

第12表は，教会の中産階層性について意見を自由記入のかたちで聴取し，これを整理してまとめたものであるが，これによると，中産階層的性格をいちおう是認し肯定するもの25.9%，中産階層的性格を積極的に打破しようとするもの26.7%。そしてその他・中立と，態度にかなりの分裂傾向がみられる。さらに「土着化」にたいする意見の聴取（第13表）の段階になると，一応全体の37%程度が何らかのかたちで土着化の必要性を肯定しているのだが，それも発想の起点はバラバラで統一した傾向はみられないようである。

むすび　さきの武田教授はさらに言葉をつづけて，こういっている。

「こうした孤立の純粋か妥協の埋没かのいずれでもない日本の文化なり思想なりとの対決の仕方，日本の土壌への健全な根のおろしかたは何か，そういう意味での土着化の問題をもう一度，根本的に，新に考え直さねばならないという反省が，いろいろの仕方で問題になって来ているのではないかと思うのです。」

はたして，この希望をかなえうるだろうか。かって明治の初期に士族を中心として，それ自身かなり儒教的な色彩——キリスト教のなかに儒教の完成をみる——や nationalistic な色彩を帯びていたキリスト教が，一時はそれよりの脱皮を試みながらも，三〇年代の大きな「地すべり」を機縁として天皇制国家主義のなかに埋没し，それから今日まで，戦後の一時期はともかく，日本のキリスト教は信仰のうえでも社会的な地盤のうえでも老化の度を加えてきているのではないだろうか。若年層をメンバーの中心にして若やいだ雰囲気のなかにありながら，宗教としてのキリスト教は動脈硬化しかかっている。牧師の出身階層にしても閉鎖的になってきているからである。明治三〇年代に，信徒と牧師におとずれた「地すべり」は古くしてしかも新しい問題であり，この解決をみることなくしては，教会の内部や一部の識者から志向されている，いわゆる「純粋な埋没」も，日本のキリスト教のよって立つ社会的地盤——中産インテリ階層——を考えるならば，逆説的にいって，そういう地盤への「埋没」とそれの補強や単純再生産におわってしまう可能性がある。さらにコメントを加えるなら，戦後民主主義を否定する動きが，最近とみに露骨になってきているとき，もしうえのようならば，地盤の脆弱さのゆえに，再び時流におし流される危険が，かってのときのように大きいのではないだろうか。

注 1）隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』(新教新書，1961) そのほか，工藤英一『日本社会とプロテスタント伝道』(日本基督教団出版部，1959)，久山　康編『近代日本とキリスト教』（創文社，1956）そのほか，など。

2）本調査の対象は，日本基督教団より145教会，聖公会より34教会，その他諸派より37教会，カトリックよ16教会，あわせて232教会である。「日本基督教団」の教会数（伝道所を除く）は全国で1,268教会（聖公251・カトリック約213〔外人神父を除く〕）。したがって，全教会数の11.6%（聖公会13.5%，カトリック7.5%）を調査したことになる。

	サンプル数	回答数(%)
日本基督教団	200	99(49.5)
聖公会	100	34(34)
その他の教派	100	37(37)
カトリック教会	100	16(16)
(補助) 日本基督教団	200	46(23)
計	700	232(33.1)

調査は，『日本基督教団年鑑』(1963) および『基督教年鑑』(1963) より宗派別にランダムで抽出し，質問紙の郵送によった。調査期間は昭和38年8月—昭和39年2月。なお学会報告，大道・宇賀・関根「現代日本の牧師」(『基督教文化学会年報』No, 12, 1965) をも，あわせて参照していただければ幸である。

3) 隅谷，前掲書，16ページ。
4) 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会，1964，114～116ページ第二・8・二表参照。
5) 隅谷，前掲書，23ページ。
6) 家永三郎編『近代日本思想史講座歴』I (歴史的概観) 筑摩書房，1959，78ページ。
7) 隅谷，前掲書，138ページ
8) 隅谷三喜男『現代日本とキリスト教』新教出版社，1962，43ページ。
9) 久山　康編『現代日本のキリスト教』創文社，1961，277ページ。

—1965. 5 .10—